

Forex

株式会社 ジャパン
エコノミックパルス
〒103-0007
東京都中央区日本橋浜町
2-33-5
Tel 03-5962-3910
Fax 03-5962-3913
www.j-pulse.co.jp
info@j-pulse.info

Market Insight

2023年7月10日（月）

全般的な円反発、持続と一服にらむ

米金利と指標、FRB幹部発言、米決算など焦点

今週の為替相場はドル/円、クロス円での全般的な円反発と外貨反落について、持続余地と一服をにらんだ展開が想定される。週間予想はドル/円が141.30-144.20円、ユーロ/円は154.60-158.20円。前週は米指標の底堅さとFRBの7月利上げ観測、米国債金利の上昇が米日株の下落とリスク回避の円高、米雇用統計の減速がドル安と円高を促した。今週は米債金利の動向と米日株の行方、物価などの米国指標、FRB幹部発言と今後の金融政策、米国企業の決算発表シーズン入りなどが焦点になる。

リスク回避での米株VIX上昇、最近は3-5週間

今週の為替相場で注目されるのは、米国債金利の動向だ。前週は米指標の底堅さや、米FRBによる6月FOMC議事録での残り2回の利上げ姿勢再確認、こうした要因による7月25-26日FOMCでの利上げ観測などにより、米国債金利は上昇となった（米債価格は下落）。米10年債金利は4%超えと、昨年11月以来の高水準に上昇する場面が見られている。

米債金利の上昇は、短期的に高値警戒感のあった米日株の下落へと作用。為替相場では「米債金利上昇＝ドル高」よりも「リスク回避＝全般円反発と外貨反落」が優勢になっている。5月以降の米日株高とリスク選好による円安には過熱警戒感があり、今週も13-14日前後から月後半まで続く米国企業の決算発表のほか、25-26日のFOMC、海外勢の夏休み入りなど前にして、ポジション調整や一旦の利益・損失確定などにより、米日の株安と円高の持続余地が注目される。

株高・円安の過熱感でいえば、シカゴIMMの投機的な円先物ポジションでネット円ショートが、最新7月3日週に-11万7920枚となった（国際通貨市場、非商業部門）。前週の-11万2870枚を含めて3週連続で円の売り持ちが増加し、2018年1月以来の大幅な円ショートになっている。目先は円ショートの調整縮減などによる、ドル/円、クロス円での円買い・外貨売りの度合いや期間などが注目されやすい。

一方で米債金利の上昇は、連動して他国の海外金利上昇も促している。日本と海外の金利差は再拡大となっており、円ショートの整理を超えた円買い・外貨売りは抑制される可能性もある。今週は米国で物価などの経済指標やFRB幹部の講演などが予定されており、インフレの根強い上昇圧力とFRBの警戒姿勢が再確認されると、微妙に「7月に続く9月の利上げ観測」が浮上。ドルが再上昇となる余地も無視できない。

ドル/円の週足テクニカルによると、当座のドル下値メドとしては10日のアジア市場時点レートで、7週移動平均線142.04円前後、9週線141.41円前後、一目均衡表の転換線140.33円前後、先行スパンの雲上限137.17円前後（8月後半にかけて135.72円方向に切り下がり）などが注目されそうだ。

WARNING! 記事並びに情報はすべて株式会社ジャパンエコノミックパルスに帰属しています。無断転載及び転送は法的に罰せられますのでご注意ください。



〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町2-33-5 マリオン浜町ビル
TEL (03) 5962-3910 FAX (03) 5962-3913
E-Mail info@j-pulse.co.jp URL http://www.j-pulse.co.jp
発行責任者：上坂 郁 編集長：原田 祥二

米株投資家の不安心理を映し、リスク回避か選好かの尺度となるシカゴ・オプション取引所（CBOE）ボラティリティー（VIX）指数は、5月以降のリスク選好による急低下が一服となってきた。6月22日には一時12.73へと低下し、2020年1月以来の低水準となったが、前週末7月7日は終値が14.83と下限が切り上がっている。6日にはリスク回避により、一時17.08にまで上昇した。目先はVIX急低下の反動調整的なVIX上昇と米国株の下落、リスク回避による円高の持続余地が注目されやすい。

一方、最近のVIX低下からの反動調整的な上昇（リスク回避）、上昇一服の局面としては、5月5日週から5月26日週までの4週間、2月24日週から3月24日週までの5週間、昨年12月9日週から12月23日週までの3週間といった日柄実績があった。現在は前週7月7日週から「VIX上昇の1週目」となっており、残り2週から4週程度、リスク回避相場が持続するか否かの見極めが重要になる。

リスク回避警戒が一服となる目安としては、7月後半にかけての米国企業の決算発表ピークアウトのほか、7月25-26日のFOMC、7月27-28日の日銀政策会合などの消化が焦点になる。その他の注目ポイントは以下の通り。

<週足、ドル/円は5週平均の下抜け焦点>

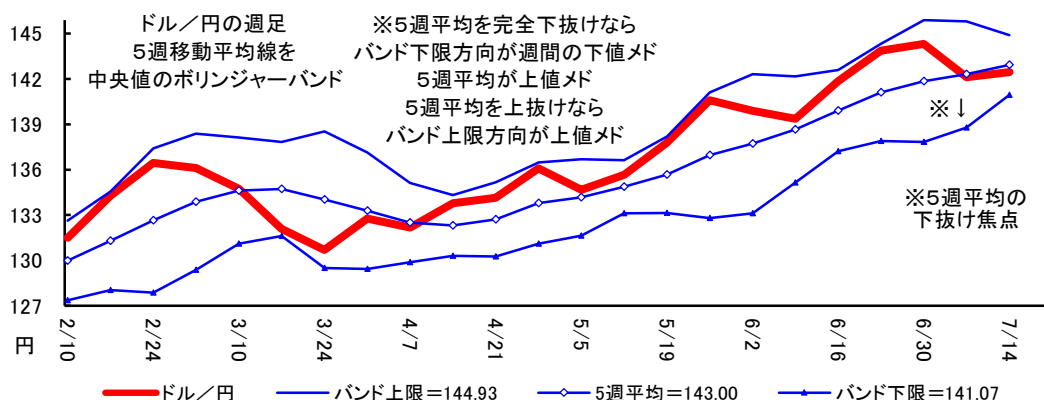
為替相場の短中期トレンド判断で参考になるのが週足テクニカルだ。ドル/円は3月24日週からドルの上昇基調が続いてきたが、前週はドルが反落となっている。7月10日アジア市場時点のレート数値によると、「5週移動平均線を中央値としたボリンジャーバンド」では、5週線143.00円前後の攻防が焦点になってきた。

上下動を経ながらも、完全に下抜けとなればドル安への基調転換が明確化。5週線などを上値メドとした戻り売りの地合いへと移行し、週間ベースでのドル下値メドとしてはバンド下限141.07円前後などの方向が視界に入る。反対に5週線を上抜け回復できると、ドル安の圧力が一服。週間ベースでのドル上値メドとしては、改めてバンド上限144.93円前後やその上の方向が意識されていく。

クロス円取引は3月24日週以降、外貨高と円安の基調が続いているが、前週は外貨が反落となってきた。ユーロ/円、ポンド/円、スイス・フラン/円、カナダ・ドル/円、豪ドル/円、NZドル/円などでは、「5週や6週移動平均線の完全下抜け」を巡る攻防となっている。上下動を経ながらも、完全に下抜けとなれば外貨安への基調転換が明確化。5週線や6週線などを上値メドとした戻り売り地合いに移行し、下値模索の基調となる。反対に5週線や6週線などを上抜け回復できると、改めて両ラインなどを下値メドとした下限の切り上がりへと回帰していく。

<米国指標、物価指標など焦点>

米国の経済指標は強弱混在が続いており、今週の為替相場は日々の指標に一喜一憂になりやすい。注目は12日のCPI（消費者物価指数）や13日のPPI（生産者物価指数）といった物価指標だ。ブルームバーグでは9日、「米国のインフレ率は軟化の可能性が高いが、基調的な物価圧力を反映するコア指標は落ち着いた上昇ペースが続き、FRBは7月FOMCで利上げ再開に傾くことになりそうだ」という見



通しを示している。

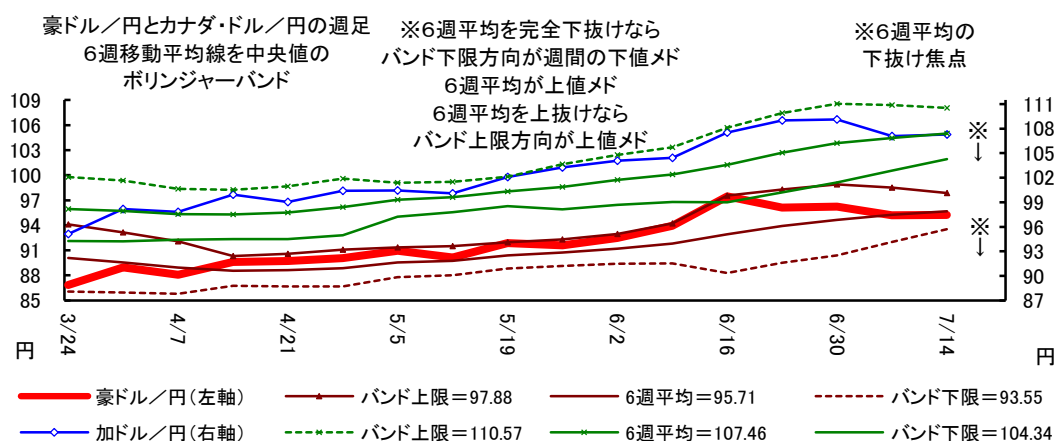
一方、米国では前週末7日に雇用統計が減速となった。ようやく「利上げの遅行冷却効果」が着目されつつあるが、今週は13日の新規失業保険申請件数や14日のミシガン大学消費者信頼感指数などで、景気の減速が再確認されるか。あるいは根強い打たれ強さが示されるかが焦点になる。

＜ユーロ、金利高止まり長期化の観測が下支え＞

欧州市場では9日、ECB政策委員会メンバーのビルロウドガロー仏中銀総裁が、「ECBの利上げは終了に近いが、これまでの利上げが十分に経済に影響を与えるのを確実にするため、金利を高原の高みで維持するだろう」と述べた。ユーロは先行き利上げ休止観測が上値抑制の材料となる一方、「金利高止まりの長期化」が下支えの要因となりやすい。

ユーロ/ドルの週足テクニカルでは、一目均衡表チャートで8月4日週にかけて先行スパンの雲上限と雲下限が交錯する「雲のネジレ」が観測されている。相場トレンドの転換につながる「変化週」を示唆するものだ。

現状、雲のネジレは、1.0466ドルから1.0522ドル前後に位置している（前週末の終値は1.0972ドル前後）。現状から8月4日週にかけては、雲ネジレの上抜け通過を見据えたユーロ下値固めからの再上昇となるか。あるいは雲ネジレとの乖離修正や、雲ネジレの下抜け通過トライによるユーロ安へと向かうか、といった展開が注視される。



お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。